
月明かりの夜

aisa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月明かりの夜

【Nコード】

N1399Z

【作者名】

a i s a

【あらすじ】

有栖川咲音が通っている紅城高校は、少し普通の高校と違っていた。

2年の各クラスに一人ずつ、クラスの裏のトップである「級長」が存在する。

それは誰も逆らうことの出来ない存在で、この地域の不良を統括する者達でもあった。

この組織を全面的にバックアップしているのは、紅城生徒会。

実は紅城高校は学校全体としての地位が高く、生徒会は市内の高校同士の抗争などを調整する役割を果たしていた。

しかし、紅城生徒会が築いてきた均衡が崩れつつあった。

近頃勢力を伸ばして来た、斉河高校の赤是竜雅。彼の目的は、紅城の地位を乗っ取ること。

不良達の熾烈な戦いが始まった。

だが、不良とは何の関係もないはずの咲音も、この争いの渦に巻き込まれていくのだった…。

基本的にシナリオ重視のラノベ的作品です。
気軽に読んでいただければと思います。

第1話 荒れる新学期

太陽はきつと…

私達を照らしてくれない。

私達は輝く必要なんかない。

本当に正しいことを、
知っているから …

とある街の、とある学校。季節は春。新学期である。

薄く緑の香る午前、暖かな陽の差す教室。

ありすがわ さくね
有栖川咲音は、しほじょう紅城高校の二年生に進学した。

新しいクラスは、2年C組。

うわ、嫌だなこのクラス…

教室の窓側の席から新しいクラスの面々を見渡す。穏やかな陽日とは裏腹に、教室の中の咲音はうな垂れた。

不良が多いと言われている紅城高校の中でも、このクラスは一段とガラの悪そうな生徒が揃っているような気がする。

やっぱりこんな高校に入学するんじゃないかなかった、と、咲音は一人溜め息をついた。

咲音は性格は真面目な方で、軽くウエーブのかかった茶色いロングヘアーや有栖川という苗字から、一部の人には「アリス」と呼ばれることもある。今まで自分が苛められた経験こそないが、あまり気の強くない咲音は不安に包まれていた。

「咲音：なんか今年ヤバそうだね…」

そう声をかけて来たのは、一年の時一緒のクラスだった速水亜弥加^{はやみ あやか}。今このクラスに、咲音が友達と言えるのは亜弥加しか居ない。

「うん：なんか男子も女子も怖い人がいっぱい…目つけられたらどうしよう」

「大丈夫だって！あんたが苛められる訳ないじゃんっ」

亜弥加は笑うが、咲音の不安は拭い切れない。

金髪、ピアス、派手なファッション…

1つのクラスにここまで集結しているのだ。1年の時は居ても4、5人、今はクラスの3分の1を占めている。

もしかして、2年になって皆はっちゃけなくなっちゃったとか？

ハア…

溜め息が出るばかりだった。

そして咲音はチラッと廊下側の後ろの席を見やった。そこで数人の女子達と会話をしている少女 徳森那津希^{とくもり なつき}。彼女は紅城イチの不
良娘として有名だった。化粧が濃く、オレンジに近い髪色、独特の

ショートカットや身に着けているたくさんアクセサリーで、彼女は存在感を増していた。咲音はその所業について詳しくは知らないが、とにかく恐ろしい。

絶対目合わせないようにしよう…。

咲音はそう心に決めた。

始業式の次の日・いきなり席替えが起こった。

「!?!」

窓側の後ろの方の自分の席を、完全に占領されている。自分が間違えたのかとも思ったが…

うっん、合ってる！絶対!!

咲音は恐る恐る不良グループのような男子達に近づいた。

「あ、あの…そこ、私の…」

男子達は非常に盛り上がっており、咲音の小さな声はかき消される。よしっ…

咲音は勇気を振り絞った。

「そこ、私の席なんですけど」

今度はちゃんと聞こえたはずだ。だが…

「あーゴメン、そこらへん座っててよ」

咲音の席に座っている男子がほとんどこっちを見ずに言った。

「うえ、あの…」

咲音は適当にあしらわれてうるたえる。既に男子の意識の中に咲音の存在は無い。

「咲音、しょーがないからここ座ろーよ」

振り返ると、亜弥加が居た。

「亜弥加あ…」

結局、2人でその前の席に隣で座ることにした。

見れば、後ろの席はほとんど派手な格好をした人達が占領している。他の人達も、咲音と同じような目に遭って適当に座ることになった。

こんなんでいいの…？

昨日の始業式で発表された、担任の米久先生（よひひさ）が教室に入ってきた。眼鏡をかけガリガリに痩せた姿は、なんとなく弱そうな印象を与える。

「…席が変わっているような気がするの、気のせいですか？」

教室を見渡し、先生が言った。

「気のせいです！」

1人の女子生徒が言い放つ。後ろの方から笑いが起こった。

「とりあえず、元の席に戻りなさい」

「えーヤダ、たるいし。ねえ？」

「だよねー、つか元の席に戻る意味がわかんないし」

また笑い声。

「何か不都合でもあるんですかー先生」

今度は男子生徒が言った。

「いいから、戻りなさい」

「っせーな」

ある男子が机を蹴った。

「さっさと話始めるよ。なあ、コメクサ」

「な…」

「あつはは、コメクサとかマジウケンだけど」
後ろからまた一段と笑いが起こった。

笑…えないから。

咲音とその他前の方にいる生徒達は、皆しんとしている。
新学期早々、最悪だ……

ピッ

「もしもし〜?」

ある日の昼休み、校舎に設置されているテラスで誰かと電話している男子。A組の生徒だ。

この男子もツンツンに立てた金髪、制服着くずし、1年の頃は相当暴れたという問題児。

「転校生?ふーん、お前んところからかア」

彼は長らく話した後、

「そんなコがねエ…楽しみだな」

ニヤリと笑った。

「うちのクラスじゃねーと思うよ、人数足りてるし
な、とりあえず様子見とく」
ん?...まあ

そして、ククツという笑い声。

「もしかしたら俺の敵になるかもしんないしね」

憂鬱な気持ちを抱えながら、咲音は電車を降りて歩いて学校に向かった。

すると少し先に、公園の前にしゃがんでいる少女の姿が見えた。

肩までのハネのある黒髪で、咲音と同じ制服を着ていることがわかった。

見ない顔だな…いや、うちの学校の生徒を全員知ってる訳じゃないけど。…新入生かな？もしかして、転校生…？

気になった咲音は、思い切って声をかけてみた。

「あのっ、何してるの？」

その時、少女に撫でられている猫が目に入った。

「捨て猫…？」

「…うん」

少女は一瞬咲音を見、猫に視線を戻して言った。するとすぐに立ち上がる。

「この高校の子？」

少女はすぐ近くにある紅城高校を指差して言った。

「う、うん。そうだけど…」

「…そっか。じゃあ宜しく」

彼女は少し微笑んだ後、学校へ小走りにかけていった。

「あ……………」

彼女の後ろ姿を見送ってから、猫を見た。

「早く飼い主見つかるの良いね」

そう言つて、咲音も学校へ向かった。

始業のチャイムが鳴り、米久先生が入ってきた。昨日から一部の生徒には「コメクサ」と呼ばれている。

「えー、新学期が始まったばかりですが、転入生を紹介します」
先生の言葉に、教室が少しざわついた。

転入生か…この高校に、しかもこのクラスに…可哀想に。

咲音の頭にはそんなことが浮かんだ。そしてピンと来た。あの子だ。

先生の合図で教室の扉が開き、入って来たのはやはり咲音が今朝会つたあの少女だった。

「カンナ神名咲夜です…宜しく」

咲夜という名の少女は、小さく頭を下げた。

「なんか…あの子怖くない？」

「うわ、こつち睨んでんだけど」

教室の後ろから、ひそひそとそんな声が聞こえた。

まずい。転入生は苛められる確率75%！！うちの学校では！！

咲夜は小声で会話する生徒をチラツと睨みつける。

「うっわ。怖っ」

誰かがそう言った。

咲音はあわあわとしながら咲夜を見つめた。

さつき猫を撫でてた時は、あんな雰囲気全然無かったのに…。

先生は顔をしかめただけで、何も言わなかった。

「では、その空いている席に座りなさい」

一番後ろの真ん中の席という中途半端な席が空いていた。不良達が男子と女子で右と左に寄ってそうになったのだ。その席のすぐ隣はあの夕子の悪い徳森那津希達のグループだった。咲夜が席に座った瞬間、彼女達はあからさまに不機嫌な顔をした。

だ、大丈夫かな…

休憩時間…

咲音はなんとなく心配で、自分の席から咲夜を見つめた。距離は2、3mくらい。

早速那津希達が声をかけていた。

「神名さん、顔怖いよ?」

リーダー格の那津希がクスクス笑いながら言う。

「あははは、もっとリラックス」

そう言ったのは那津希の側にいつも付いている鈴原莉奈。

「もしかして怖がってんのかもよ?」

一段と派手で背の高い坂蔵カナが言った。

「やだーそれダサすぎだし」

続く神崎茜の一言に、笑いが起こった。

他の2人も笑いに混ざっている。

そんな声は全く聞こえていないかのように、咲夜は黙って本を読んでいた。

咲夜を取り囲んでいるこの女子6人組が、C組の所謂女子不良グループだった。

「ほら無視しないしない」

那津希が咲夜の本をバサツと取り上げる。

「神名さんさあー…って、何」

咲夜は真っ直ぐに、那津希を睨みつけた。

すぐに席を立ち、教室を出て行ってしまった。

「あっ…」

咲夜ちゃん…

「何あの態度」

「転校生のくせに。せっかく話し掛けてやったのに」

6人組は口々に悪態をつく。

「ビビってんじゃないの？」

「うわーウケんねそれ」

「からかうの楽しーじゃん」

また笑いが起こった。

「ねえ亜弥加、まずいよ…」

「何が？」

「咲夜ちゃん！このままじゃ徳森さん達にずっと絡まれるって！」

「あー…」

「私、話し掛けてくる！」

とは言ったものの、咲夜は休憩時間の度に那津希達に絡まれていて、咲音が話し掛ける隙も無かった。咲夜はその間一言も口を聞かなかった。

そして、放課後…

「神名さーん、どっか遊びに行こーよ」

カナがまた、わざとらしく声をかける。

咲夜は無視を続け、鞆を持って教室を出ようとした。

「ちよつと」

那津希が呼び止めた。

「あまりにも愛想が悪すぎんじゃないの？そんなんじゃない友達出来ないよ」

「お前らなんかと仲良くする気は無い」

「な…」

そう言っつて、咲夜は教室を出て行った。

「ウザー…」

「何あいつ、調子乗ってんじゃないの」

「おー…」

「何？咲音」

「いや、咲夜ちゃん、カツコいいなあって…」

「ふーん…まあ、あの様子ならイジメられることはないんじゃない？」

「んー…そうかなあ…」

咲音はまだ心配だった。

どうしてあんなに突き放すのかわからないけど…今朝のあの笑顔は優しかった。

私は咲夜ちゃんの優しさを知ってる…だから、私が友達になってあげなくちゃ！！

咲音はそう決意した。

次の日、咲音が朝学校の廊下を歩いていると前に行く咲夜が目に入った。

「あ、咲夜ちゃん！おはよう」

咲音はすかさず駆け寄り、ニッコリ笑って挨拶をした。

「ああ…おはよ」

…そっけない。いきなりちゃん付けは馴れ馴れしかったかな？

「あのさ、この前の猫…」

「ん？」

私のこと覚えてくれてたんだ…良かった。

「居なくなってた…。ダンボールに敷いてあった布もなくなってたから、多分拾われたんだと思う」

「…そっか！良かったあ」

「うん……」

咲夜は少し微笑んだ。

忘れてた。でも猫の心配してたとは…やっぱり咲夜ちゃんは良い子だ、うん。

「あ、そだ、私有栖川咲音。宜しくね」

「アリス…？」

「うん、時々そう呼ばれるんだ。あはは」

「そっか」

咲夜もクスツと笑った。

その時、後ろから2人の女子生徒がやってきて、1人がいきなり咲夜に肩をぶつけた。

と、徳森、さん…

ぶつかって来たのは那津希。と隣には莉奈。

「神名さん、友達なんか要らないって言ってなかったっけ？」

「そうは言っていないだろ」

「あたしらはダメなのに、アリスちゃんなら良いんだ」

那津希は皮肉っぽく言う。

「お前には関係ない」

「…っ…調子乗りすぎじゃない？ウザいんだけど」

那津希がキレかかる。

「那津希、ヤバイ。コメクサ来たよ」

莉奈が米久先生に気付いて那津希を止めた。

「チツ邪魔な奴…」

そう言い残して、2人は教室に入っていった。

始業のチャイムが鳴る。

嫌だ、入りたくない。あんな人達が居る教室に入りたくない。

咲音が立ち尽くしていると、

「っと…咲音？早く教室入るーよ」

「は…あ、うん」

咲夜は何事もなかったようにそう言って、教室へ入っていった。

咲夜ちゃん…凄い子が転入してきたもんだ…。

咲音は啞然としながら教室に入るのだった…

それから、那津希達は咲夜の行動や言葉に一々つつかかるようになった。

その度に咲夜は無視するか言葉で突き放している。

こんな日が続き、クラスに咲音以外で咲夜に話し掛ける人は居なくなってきた。

昼休みも…

「ねえ、咲夜ちゃんも呼んでいい？」

皆でお弁当を食べるために机をくつつけていた時に、咲音が言った。

「えー、やめてよ。徳森さん達が来ちゃうじゃん」

「関わらないほうが良いつて…絶対」

友達にそう言われてしまう。

そしてある日、咲夜はSHRが終わるとすぐに教室を出してしまうので、咲音も急いで後を追った。

校門を出てからも、なんとなく話しくく、咲音は咲夜から2、3m離れて歩いていった。

すると、ふいに咲夜が立ち止まって振り返った。

「！」

「何？」

気付かれていたらしい。だがその声はあまり不快そうではなかった。

「あ、あの…駅同じだよな？一緒に帰ってもいいかな…？」

咲夜は少し黙っていたが、やがて顔を緩ませ微笑んだ。

「いいよ」

微笑って くれた…

「あ、ありがとう」

2人は並んで歩き始めた。

「咲音：やっぱりお前、他の奴らとはなんか違うな」

「え？」

「良い奴だよ」

「そ、そうかな？」

「うん」

「あ、えーと…なんていうか、大丈夫？徳森さん達のこと…」

「ああ…本当にしつこい奴らだけだな、私はあれくらいなんともない」

「…皆、徳森さんが怖くて…止められないの。ゴメン…」

「大丈夫だよ。気持ちは分かっているから…」

優しいなあ、咲夜ちゃん…

「ねえ、咲夜ちゃんって…なんでうちの高校に来たの？」

「…聞きたいか？」

「あ いや、話したくなかったら、良いんだけど…」

なんとなく、聞いちゃいけないような、そんな気がした。

咲夜はクスツと笑った。

それからしばらく二人は他愛の無い会話をして、駅の改札口で別れた。

咲夜ちゃんはあるなに優しい子なんだから、きつと皆と上手く
やっつけていけるよ。
だから徳森さん達に、止めさせなきゃ…！

第2話 クラスの敵

ある日の昼休み、咲夜がまた那津希達に絡まれていた。

「ねえ神名さん、数学の宿題やってたよね？写させてよ」

「あたしも」

「…他の奴に見せてもらえば良いだろ。いきなり馴れ馴れしくするな」

やはり咲夜は拒絶する。

「別に、写すだけだしー？」

「いーじゃんちよつとくらい」

カナが咲夜のノートを奪った。

「お前…」

咲夜は取り返そうとするが、背の高いカナにノートを高く掲げられると手が届かない。

ガタンッ

揉み合っているうちに、咲夜の足が不良男子生徒の机の脚に当たった。

「うわっ何すんだよてめえ」

咲夜はその男子を一瞬だけ強く睨んだ。

気がつくのと、カナ達がいつの間にか咲夜のノートにラクガキを始めている。

「きゃはは、ウケるッ」

「表紙にも書きちゃおーよ」

「うつぜーな、女のクセに」
男子生徒も悪態をつく。

「返せ！」

止めなきや、止めなきや、止めなきや…
咲音はさっきからその様子を見ていた。
決めたの、私が止めなきやいけないって…！

ダンッ！！

咲音は、勢い良く両手で机を叩いて立ち上がった。

一瞬、全ての音が消えた。
それから、少しずつ教室がざわつく。

「何、アリスちゃん」

口を開いたのは那津希。

「咲音…」

「もつやめてよ…！」

咲音是那津希達に向き直って言った。

「あーあーうるさいうるさい」

「お嬢様は良い子ぶりっ子ですか」

「な…」

私はそんなんじゃない…！

どうして…どうしてそうやって転校生をからかったりするの？咲夜ちゃんが一体何をしたの？」

「何なの？口出してこないでよ」

「あんたみたいなお嬢はあたしら庶民とは格が違っんでしょ？」
皮肉を得意とする那津希が言った。

「違う！！…仮にそうだととしても…だからって、咲夜ちゃんを助けちゃいけないの！？」

「……………」

女子達は口をつぐんだ。

「…もういいよ、咲音」

咲夜が静かに口を開く。

「咲夜ちゃん……………」

「意味わかんないわ。呆れた」

一瞬黙っていた那津希が溜め息まじりに言った。

「こっちのセリフだ」

「はあ？」

那津希は食い下がったが、咲夜は鼻でわざとらしく溜め息をつくとき、席に座った。

「…カック……………」

那津希の怒りは膨らんでいく。

「咲音、あんた、スゴいよ」

すでにお弁当を食べていた友達が言う。

「そんなことないよ…」

咲音は苦笑する。

これで、良かったのかな？

止められたけど、徳森さんをさらに怒らせちゃったよ…

複雑な気持ちだった。

その日の放課後。

「咲音」

「ん？」

咲夜に声を掛けられた。

「…ありがとう」

咲夜はすれ違いながら、そう言った。

「うん」

振り返り、咲音は笑顔で応えた。

「あ、今日」

一緒に帰ろうと、言おうとしたが、咲夜はすでに行ってしまった。

咲音と一緒に帰らなかったのは、少し懸念していたことがあったからだ。

咲夜が、昇降口で靴を取ろうとした時…

「神名さん」

振り返ると、あの6人組の1人、神崎茜が立っていた。

「…何？」

「先生が呼んでるよ。職員室まで連れてってあげる」

「……………」

咲夜は違和感を感じたが、一応ついて行くことにした。

茜が向かった先。やはり職員室ではなかった。

「おい。ここ視聴覚室だろ？」

咲夜が言っていると、茜はクスクスと笑った。

「いいから、」

言いながらドアを開ける茜。

「入ってよっ」

「っ…」

茜はドンツと咲夜の背中を叩き、教室の中に押し入れた。

「いらっしゃい」

薄暗い部屋に、やけに明るい声が響いた。

声の主は、那津希。周りを見渡すと、茜以外の5人組。茜も中に入
って、5人に加わった。各々、机の上に座ったり壁に寄りかかった
りしてこちらを見ている。

まるで愚か者を嘲笑うかのような目で。

予想が当たったか…

咲音と一緒に帰らなくて良かった。咲夜はそう思った。

「何のつもりだ」

とりあえず口を聞いてやる。

「あんた、マジでムカつく女だからさー…お仕置きしてあげようと思ってる」

そして那津希はニヤリと笑った。

「でもね、許してあげないこともないよ…ここで謝ればね」

咲夜はフツと笑った。

「私が謝ると思ってるのか？」

「さあね…無理矢理にでもやらせるけど」

冷酷な笑みを零す那津希。無理矢理にでもやらされるつもりも無かったが。

「ほら、さつさと土下座しなさいよ。ごめんなさいって」

かなり嫌みな顔で言う那津希に、咲夜は怒りを覚えた。何が何でもしてやらないと思った。

咲夜が全く動かずにいると、那津希の隣に居た莉奈が、

「何ポーっとしてんのよ。自分の立場、わかってんのかっつもの!!」

咲夜の肩に掴みかかり、強引に座らせようとした。

クソ…

ドスッ!!

教室に、鈍い音が響いた。

「うっ…」

咲夜の右膝が、莉奈の腹に直撃したのだ。

続けて、咲夜は痛みに腹を抑えた莉奈の首の後ろを右手を払って殴り、莉奈は床に倒れ込んだ。

悶える莉奈を見ながら、5人の顔色が一気に青色に染まった。

全員が言葉を失い、一瞬の沈黙が訪れた。

「…なっ、何すんの、あんた…」

那津希が目を見開いたまま言葉を拾う。その姿を咲夜は冷酷に見つめた。

「お前らも、やられたくなかったらここから出てけ」

その言葉は、棘のように思えた。表には出さないものの、皆がこの転校生に恐怖を感じた。

だが、ここで引き下がっては那津希のプライドが廢る。

「やられる？あんた、まだ自分の状況を理解してないんだね！！」

那津希が咲夜に飛びかかり、ガシツと首を絞めた。どうしても両手両膝を床につかせるつもりらしい。

「カナ！！茜！！」

「おっっ」

ボスが仲間を呼び、咲夜の体は拘束され……る前に、咲夜は右肘で那津希の腹を突き、腕を掴もうとしてきたカナを殴り茜を蹴り、一瞬で3人を倒してしまった。

それはもう凄まじい、反射神経瞬発力、そして体力だ。

床や壁に打ち付けられた彼女達は動くことが出来ず、莉奈も未だ立ち上がれなかった。

喧騒に参加していなかった二人も声を失ってその場に固まっていた。

咲夜は中央に君臨していた。

咲夜が茜に呼ばれた、少し後

「あ、有栖川。神名を知らないか？」

咲音は、彼女らの担任、一部通称コメクサこと米久先生にそう言われた。

皮肉にも、本当に先生は咲夜に用があったらしい。もちろん那津希らは咲夜を呼び出すために口実を使ったのだが。

「咲夜ちゃん…ですか？もう帰っちゃったと思うんですが…」

「探して来てくれないか？至急なんだ」

至急も何ももう居ないんだって…

咲音はそう言いたかったが、なんとかこらえた。

「わかりました、探して来ますね」

断っても良かったのかもしれないが、人の良い咲音は引き受けた。靴があるか確認して、無かったら間に合いませんでしたって言おう。どうせ無いだろうと思って咲夜の下駄箱を覗く。

「あれ…」

意に反して、そこには咲夜の黒いローファーが堂々と置いてあった。

まだ帰ってなかったんだ。

しょうがない。

引き受けた手前、探すしかなかった。

とりあえず教室に行く。居ない。

トイレ。人気なし。

うーん……

まだこれっぽっちも探していないのに、咲音は頭を捻る。移動教室以外ほとんど教室に居る咲夜の行く当てなど、他に想像出来なかった。

片っ端から探すしかないか。

そう思い決めて、2年C組の教室がある3階から順に教室を回って下っていくことにした。

3階は東校舎には2年全8クラスの教室が並んでおり、渡り廊下を渡った西校舎は特別校舎棟となっている。1階から5階まで、特別校舎棟は音楽室や美術室、準備室などの類で埋まっている。

3階を全て回り終えたが、咲夜の姿は無かった。もし移動していたら元も子もないな。そう思ったがどうしようもない。

階段を下り、2階へと到着した。ここは3年生の教室が並んでいる。まさか3年の教室には居ないだろうと思い、特別校舎棟から回ることにした。

渡り廊下の窓からは、夕日が差し込んでいる。もうじき日が暮れるだろう。

廊下を渡り終え、角を曲がろうとした、その時だった。

ガタンッ！

何か壁にぶつかるとかのような、あるいは何か倒れるような派手な音が、奥から聞こえた。

咲音は一瞬ビクツツとして立ち止まる。

…何の、音？

次の瞬間、さっきと同じような音が、今度は立て続けに聞こえた。これはただ事ではない。

咲音は少し迷ったが、音が聞こえてくる教室へと足を踏み出した。

それは、視聴覚室だった。

近づいていくと何か声が聞こえてきた。何を言っているかはよくわからない。

何度も葛藤した末、意を決して扉を開けた。

ガラ…

「……！」

咲音の目の前に、とんでもない景色が飛び込んできた。

「あ、あ、あの…！」

もはや呂律が回らない。目の前の状況処理に、頭が追いつかなかっ

た。

4人の女子が痛みを堪えながら倒れている。教室の隅には、怯えて固まっている女子が2人。

そして、その中心に佇んでいるのは 咲夜。

「咲音……」

まだ混乱が解けていない咲音の耳に、咲夜の声が入り込んだ。

それとほぼ同時に、

「有栖川……？」

という、米久先生の間延びした声が外から響いた。

まずい……！！

咲音はとっさにそれだけ判断した。近づいてくる足音が、咲音を直感的に動かす。

「咲夜ちゃん……！！」

咲音は瞬時に咲夜の腕を掴んで、教室の外へ引つ張り出した。

「っちょ……」

ピシッ……！！

戸惑う咲夜をよそに、勢い良く扉を閉めた。

おー神名、こんなところにいたのか。そう言う先生の声が聞こえた。先生が咲夜に何の用があったのかは知らないが、とにかくこれで咲音の役目は終わった。

そして、気付いた。

あ。

まずい、勢いで自分まで中に入ってしまった。背中に視線を感じる。

「……………」

咲音はゆっくりと振り返った。

「何やってんのよ、アリスちゃん」

那津希の言葉に、思わずビクツとしてしまった。

「あんたが何でいきなりここに来たか知らないけど…」

言いながら那津希は静かに立ち上がった。咲音も何で自分がここに入ってしまったか知らないのだ。

「昼休みのこと、覚えてるよね？」

「……………」

やっぱり…昼休みのこと恨んでるよね。恨んでますよね。恨みますよね。

咲音の体は固まったまま、顔だけが蒼白を帯びた。

咲音が口を開かずにいると、また那津希が話し出した。

「…やっぱりね。あんた、本当はあたしに逆らえないんじゃない」
う。

この言葉にはグサツと来る。反論が出来ない。

皆が近づいて来て、咲音は取り囲まれる形になった。

「ただ皆の前で良い子ぶってただけじゃねーの？」

カナも咲音を罵倒した。

「弱い弱いにんげ〜ん」

茜が歌うように言う。かすかに笑いも含まれていた。

「咲夜ちゃんを助けたいって？そんな生ぬるいこと言ってる奴が、強い訳ないじゃない」

那津希の一言に、咲音は完全に下を向いてしまった。歯を食いしばる。言い返せない自分が悔しい。

さつきはあんなに勇氣出たのに…何で……

「とりあえずあんた、超ム力つくからさあ、覚悟しときんな」

そい言い残して、那津希らは視聴覚室を出ていった。

咲音は一人、教室に取り残された。

咲夜が米久先生との話を終えて視聴覚室に戻る途中、不運なことに那津希達とすれ違った。

咲夜は睨み付けていたが、那津希はすれ違い様にふっと笑って言った。

「覚えてろよ」

復讐の、合図だった。

「か……は……」

咲夜が視聴覚室に戻ると、咲音がふらふらと教室から出てきた。何やら危ない雰囲気だ。咲音は咲夜を見ると、その場に座り込んだ。

「大丈夫か？咲音」

慌てて駆け寄る。

「咲夜ちゃん……私……」

泣いてはいなかったものの、精神的にかなり参っているようだ。

「あいつらに何か言われたのか？」

「うん……もうボロボロだよ」

咲音は苦笑した。

「あたしに逆らえない弱い弱い人間だとか、生ぬるいこと言ってる奴が強い訳ないとか……」

私、もう自信無くなっちゃった……」

「……………」

咲夜は、ゆっくりと咲音の肩に手をおいた。咲夜のぬくもりに触れ、なんとなく心が落ち着いてきた気がした。

「咲音。お前は、強いよ」

そんなこと、ないんだよ。本当に……

咲音は微かに首を横に振った。

「ごめんね、私余計なことしちゃったみたいで……そのせいで、咲夜ちゃん……」

そこで咲音はハツとする。

「あ、咲夜ちゃん大丈夫だったの？さっき凄い音がして……それで行ってみたんだけど」

「ああ……私は大丈夫だ」

「何があつたの……？」

「……無理矢理土下座させられそうになつたから……やつつけた」

は？

咲音の動きと思考回路が停止してしまった。

“ヤツツケタ”？

とりあえずの処理事項は、「久しぶりに聞いた言葉だな」。

「な、殴つた、の？」

止まっていた口を動かす。何をすればあんな凄い音が鳴るんだ。

「まあな」

咲夜は普通に肯定した。咲音は啞然とするばかりである。

「すごいな……私には出来ないや……」

「ごめん。引くよな、暴力ふるう人間なんて」

咲夜は少し苦笑して言った。どこか寂しげな雰囲気を纏っている。

「そんな」

「1つだけ言う。私があいつらに呼ばれたのは、お前のせいじゃない」

そう言うと、咲夜は立ち上がって歩き出した。

待って…

私、咲夜ちゃんに近付きたくないなんて思わないよ…！
だから、待って…！！

「咲夜ちゃん！私、引いたりしてないから…！」

咲音の声に、咲夜は歩を止めて振り返った。

「凄くなって思ってる…」

咲夜ちゃん、あんな席なのにへこたれなくて…徳森さん達に何言われても、言い返したり、今だってやつつけちゃうし…

本当、尊敬してる」

「咲音…」

「咲夜ちゃんは、強いから…私なんか、何やってもムダかもしれない、けどそれでも、咲夜ちゃんの助けになりたいって、思ってるんだよ。だから、一人で背負おうとしないで…」

きつとムダじゃないって、信じたいから…

あなたに、笑ってほしいから。

咲音が立ち上がるにつれて、意志も比例するように強くなる。

「私なんか頼りにならないかもしれないけど…何かあったら、いつでも言ってね」

「…私、なんか……」

「良いの」

咲音は優しく微笑んだ。

「当たり前だよ。友達なんだから」

「!……」

巻き込んで、しまった。自分のせいで。咲音は那津希達に確実に目をつけられた。その理由は、紛れもなく、自分を助けたせいだから、自分から遠ざかろうとした。もう関わらなければ、咲音を傷つけることは無いと。でも、彼女は…

「ごめん、ありがとう…」

咲夜は、謝罪と感謝の言葉を並べた。咲音はニコツと笑った。

カチッ

少女の目の前には、一台のノートパソコンがあった。今開いたホームページは、「紅城高校裏サイト」。
少女は、その掲示板に書き込みを始めた。

『受刑者

2年C組 神名咲夜

有栖川咲音

罪内容

暴力行為及び他生徒への侮辱

よって、この2名をクラスに危害を加えるものと見なし、排斥することを請求する。

逆らう者や、受刑者に荷担するものは、同罪と見なす。

以上 制裁者』

そして、書き込みボタンを押した。

第3話 級長登場

次の日、朝の2年C組は騒然としていた。

「ねえ、見た？裏サイト」

「見た見た、ついにつて感じだよねー…」

「何！？誰が書いたの？」

「徳森さんに決まってるでしょ。あー怖い怖い」

「あー…そりゃ逆らえないな。可哀想だけど…」

女子達の声に混ざって、男子も会話を始める。

「そーいや徳森ってうちの級長になったんだっけな」

「そうそう。ついに裏のトップが動き出したな」

中にはワクワクした表情を見せる者もいた。

「咲音ー…大丈夫？」

亜弥加は教室の隅で沈みまくっている咲音に声をかけた。咲夜はまだ来ていない。

咲音は裏サイトに干渉することが無く、先ほど学校に来て初めて知った。

裁きだ。自分と咲夜が、ターゲットにされた。

「私…なんか悪いことしたかなあ…」

今にも泣きそうな声で言う。

「咲音は悪くないって。那津希が勝手にキレただけなんだから」

「うん……」

サイトを見ていなかった生徒にも凄い速さで伝わり、咲音に挨拶をする生徒さえ居ない。

だが、亜弥加だけは側に来て慰めてくれた。

「亜弥加…私の近くにいたら、亜弥加まで……」

「バカ、何言ってるの。あたしはそんなこと気にしないよ」
亜弥加の優しさが身に沁みる。

はぁ……………

盛大な溜め息が零れた。

級長は、1クラスに1人ずつおり、学年で8人いる。

所謂クラスの「裏のトップ」というべき存在だ。

「級長」とは言っているが、実は2年にしかおらず、前年度の級長が話し合って次の級長を決めるのだ。

基準は、クラスで絶対的な力を持つ存在　誰も逆らうことが出来ない人物。

級長には様々な権利が認められている。

代表的なのは、「掲示板で制裁者を名乗る権利」で、掲示板に書き込まれた内容にはクラスメート全員が従わなくてはならない。

もちろん無関心な生徒も居るが、逆らうことはしない。級長全員を敵に回すことになるからだ。

そして、新しく2年C組の級長になった徳森那津希は、「制裁者」として咲音と咲夜の名を書き込んだのだ。

宣戦布告　復讐の始まりだった。

チャイムが鳴り、咲夜が来た。同時に教室の空気がさわっと動く。皆がチラチラと咲夜に視線を送る中を全く気にする様子もなく歩いた。

「神名さん」

咲夜が席に着くと、那津希がすかさず話しかける。何かふっかける気だ。咲夜はシカトしていた。

「粹がつてられんのも今のうちよ。あんたなんかすぐに、皆の嫌われ者になるんだから」

「……………」
何のリアクションも見せずに、鞆を教科書をしまっ咲夜。

咲音の心は、ズキッと痛んだ。

私のせいだ…私が余計なことしたから。助けになんて全然なってない。むしろ状況を悪化させただけ…

「……………」

自分の無力さに、失望した。

那津希は鼻で笑うと、自分の席に戻った。

そして、昼休み

皆の目を避け、咲音は咲夜を誘って亜弥加も一緒にテラスで弁当を食べることにした。人は少し居たが、隅の方に座った。

「はぁ……」

一日中、溜め息ばかりの咲音だった。

「……………」

咲夜は今日、ほとんど口を開いていない。

「咲音、咲夜ちゃんも、元気出しなよ……って、出ないよね……」

「話し掛けてくれるの、もう亜弥加だけみたい」

「そんな消極的になってないでさ、まだ始まったばかりだよ？何とかなるよ、絶対！」

「亜弥加……さつきはああ言ってたけど、やっぱり関わらないほうがいいよ。徳森さんは級長なんだし……」

「……咲音」

「？」

「あたしは……その級長っていう制度、元々反対だった。ずっと、なくなれば良いのにつて、思ってた。面白がってる人もたくさん居るけど……でもあたしは、絶対ダメだと思う」

「うん」

「だから、もうこーなったらさ、級長潰しちゃうくらいの勢いで反抗しようよ……」

「ええ？」

級長を潰す……普通なら有り得ない考えだ。

「…ああ、それには私も賛成だ」

「咲夜ちゃん！」

ずっと黙っていた咲夜が同意した。

「よし、じゃ決まりね！」

亜弥加がグーという仕草をする。

「ちよちよちよ待ってよ！」

咲音は慌てて止めに入った。普通に言っているがこれはとんでもないことだ。

「君達級長サン達の怖さを知らないね！？あの人達を敵に回したら

」

「回したら？」

「！！！！」

心臓がドクンと跳ねた。

いつの間にか、一人の男子生徒が目の前に立っていた。金髪の短い髪を立たせ、抜群のルックスに強い瞳を持った男。その人物は……

「2年A組級長、天馬^{テンマ} 戒^{カイ}……」

テラスに、一陣の風が吹き捲いた。

「あれ、俺の名前知ってたんだ。嬉しいねエ」

咲音でも知っていた。彼は2年の間では有名なのだ。つまり、危険人物。

「那津希チャンがなんか言ってたからさ、どんな奴か気になって探してたんだよ。こんな隅っこで昼食かア、寂しいねエ……」

「何の用だよ」

咲夜は天馬を睨みつけて言った。

「君、転入生だよね？会えるの楽しみにしてたよ」

「？」

天馬は不気味に笑った。

「それにしても、転校早々那津希チャン達と争うなんて、運が無いね。…：そっぴや、受刑者は二人だけって聞いたんだけど？」

亜弥加は少し冷や汗をかいた。

「ま、どーでもいいか。で、さっきの『級長を潰す』っていうのは？」

「……………」

「そのままだよ。その訳分かんねー制度ごとお前らをぶっ潰すっつってんだ」

黙ってしまった咲音と亜弥加に代わり、咲夜ははっきりそう言った。

「へえ…：面白いね、君」

天馬は口の端を吊り上げて笑う。

「咲夜ちゃん……」

「…じゃあ、級長を敵に回すつてのがどういうことか、教えてやんねーとな…」

「！待って！！」

咲音が止めるも、天馬は咲夜に近づいていく。咲夜は弁当を地面に置くと、立ち上がって身構えた。

天馬の右ストレートが、咲夜の顔面に放たれた…。

女子の顔を殴るなんて、なんて最低な男だ。私だったら絶対に治療費と慰謝料を請求する！

と、目をギョツと瞑った咲音は一瞬の間に考えていた。

「…何のマネだ」

「え…？」

見ると、天馬の拳は咲夜の顔面スレスレでピタリと止まっていた。

「なーんてね」

天馬は右手を下ろすとヘラと笑う。

「俺が直接手を下す必要もねえよな。どーせ那津希チャンが暴走しただけだろ？それに、君達面白いから、何すんのか見てみたいし」
「はあ…？という顔で咲夜は天馬を眺める。

「ま、他の級長も俺には手エ出せねーしな。楽しませてもらうよ」

「…お前、ふざけてんのか？」
「ククツ、さーね。…つか、俺のストレートに微動だにできなかった君が初めてだよ。一応誉めとく」
「そう言い残すと、天馬は校舎へと入っていった。
テラスに居た人達もいつの間にか居なくなっていた。おそらく天馬が絡み始めた時に逃げたのだろう。」

「…咲夜ちゃん、大丈夫…？」

咲音は心配そうに咲夜の顔を覗き込んだ。

「ああ、あいつが本気で殴ろうとしてなかったの、分かってたから…」

「え、分かってたの!？」

天馬 戒…

あいつは一体何者なんだ…？

第4話 夕空ノ後ノ月

昼休みが終わり教室に戻ると、クラスの雰囲気は午前中よりもさらに悪化した。

咲夜は軽く舌打ちを漏らす。

「あいつら…バラ卷きやがったな」

「え？」

こそこそと、クラスメートの話し声が聞こえてきた。

「肩掴まれただけで殴ったんだって。めっちゃ怖くない？」

「ほんとに女子…？有り得ないんだけど」

「あのお嬢アリスも、皆の前で良い子ぶってただけなんだって。本当は逆らえないんじゃないかねえ…」

酷い言われようだ。しかし、反論出来ないように上手く話を振り撒いている。

「…うるっさいな」

そこで口を開いたのは、亜弥加だった。

「あたし、そうやって影でネチネチ言うの、嫌いだよ。しかも全部聞こえてんのよ」

「そりゃあ…」

「聞こえるように言ってたんだし」

女子達はクスクスツと笑った。

「……っ」

そこで、先生が入って来た。

先ほどの生徒達は、つい最近まで亜弥加の友人だった。周りと打ち解けるのが得意な亜弥加は、新学期が始まってすぐに新しい友達がたくさん出来ていた。
でも…

自分のせいで亜弥加まで巻き込んでしまったことが、咲音は辛くてどうしようもなかった。

夜、咲音は枕を抱えてベッドに座り込む。

「……………」

今の状況じゃ、きつと何を言い返しても無駄…

咲音は、この最悪な展開を打破する策を見いだせなかった。

あの人達が全部悪いって思ってたけど、本当は違うのかな…。やっぱり、暴力はダメ、かな…。自分の身を守るためでも？でも、何があっても暴力はふるっちゃダメだって教わった気がする…。うーん…。私も、あの状況じゃああ言われてもしょうがない、か…。教室では止めたくせに、6人に囲まれたら何にも言えないんだもんね。情けないな…。

咲音は一人、苦笑した。考えれば考える程、自分に自信を持ってなくなってしまう。

このまま良い子ぶりっ子と言われ続けて、皆に嫌われていくしかないのか…

いつの間にか、頬を涙が伝っていた。

自分の無力さに対する失望、どうしようもない絶望、亜弥加への罪悪感…

全てが咲音を取り巻き、底へ底へと引きずり込んでいくように。

でも、咲音は闇に飲み込まれなくなかった。もがきたかった。ただ、その方法が見つからなかったのだ。

その時、一つの答えが浮かんだ。

「謝ろうよー!!」

「「は?」」

昼休み、昨日と同じように三人はテラスの隅に座り、弁当を食べていた。

咲夜と亜弥加は啞然として次の言葉を待つ。

「ほら、咲夜ちゃんは徳森さん達に暴力ふるったこと、私は皆の前でしゃばったことを謝るの!」

「「却下」」
「ガーン。」

「で、でもちゃんと謝れば徳森さんも分かってくれるんじゃない?」
「謝ったって下に敷かれるだけだ。さらにバカにされるぞ。逆効果だ」

「そーだよ!悪いのは那津希達なんだから
二人揃って猛反対だ。」

「でもさ、徳森さん達は咲夜ちゃんのノートに落書きしたり、謝らせようとしただけだし」

「あんだ那津希に味方する気？」

亜弥加が少しムツとして言う。

「いや、そういう訳じゃ無いけど…」

やっぱりダメ、かな…。やっと導き出した答えだったのに。

「じゃあ、どうすれば良いの？」

咲音は亜弥加に聞き返す。

「うーん…こっちも少しは間違いを認めても良いけど、あっちにも間違いを認めさせんのよ」

「どうやって？」

「そーね…『あんたは級長の権利を乱用してる』って言っても、上手く言い訳されそうだし…」

「だったら級長の権利を奪うしかねーだろ」

咲夜が口を挟んだ。

そ、そう来ますか…

「権利を奪うか…良いねそれ！でもどうやんの？」

亜弥加がノった。

「簡単だ。級長つてのは、誰も逆らうことが出来ない奴がなるんだろ？だったら、皆が徳森に逆らえばいいんだ。立場を逆転させるんだ」

「確かに、そうすれば級長じゃいらなくなるだろうけど…」

亜弥加が溜め息をつく。

「問題は、どうやって皆を味方につけるか、だよね…」

今、クラスメートに咲音達と那津希達、どちら側につくかと聞いた

ら、迷わず全員那津希と答えるだろう。咲音達に味方して級長を敵に回そうとする生徒など居ない。

「…話してみなきゃ始まんないよ。皆、徳森さんの前だと私達に近付けないだけかもしれないし…」

私、話 してくる!」

咲音は立ち上がった。

「待つて咲音!行かないほうが良い…」

亜弥加が止める。

「どうして?」

「…皆、もう………」

「?」

亜弥加の言葉はそれ以上続かなかった。

「行っても、後悔するだけだぞ……」

代わりに咲夜がそう言った。

「期待しなければ…これ以上傷つくことも無い」

咲夜は意味深に呟いた。

「え…?」

亜弥加が「行かないで」と咲音のほづを見る。

どづいづいこと?

…でも!

咲音はテラスをあとにした。

「咲音…」

亜弥加も立ち上がるうとした。

「行くな」

咲夜がそれを止める。

「お前が行けば…多分、面倒なことになる」
「……………」

咲音…………

咲音が教室に現れると、クラスメイト達が一気によそよそしくなる。最近はいつもそうだった。

那津希達も居たので、咲音は教室から出て、女子達がトイレに行くタイミングを見計らっていた。

「あ……………」

女子達が数人、教室から出て、トイレの方向へ向かって来た。

「あのさ、皆……………」

彼女らは怪訝そうに顔を見合わせる。

「徳森さんのことなんだけど…私、皆が徳森さんに従わなくなったら、徳森さんも級長じゃいられなくなると思うんだけど…どうかな？」

女子の一人が首を傾げる。

「どつって何。…あんたさあ、なんか勘違いしてない？」

「!?!」

「確かに那津希は嫌いな子だけどさ、実際あたし達に被害は無いし。別に不満がある訳でもないのよ」

「……………」

「そーそ。有栖川さんが何考えてんのか知らないけど、徳森さんには絶対逆らえないよ」

「有栖川さん達を助けるために何であたしらが那津希に逆らわなきゃいけない訳？」

「そんなことしたくないよね」

女子達は次々と咲音の期待を裏切っていく。そして…

「てかさあ、有栖川さんも馴れ馴れしくあたしらに話し掛けてくんのやめてよ。」

もう友達じゃないんだからさ」

!?!……………

ひどいよそれーとか、だつてなんかウザいしとか言いながら、女子達は笑いながらトイレに入ってしまった。

咲音は一人立ち尽くしていたが、女子達がトイレから出て来るのを恐れてその場を離れた。

教室に戻る気にはなれなかった。

『期待しなければ…これ以上傷つくことも無い』

その時初めて、咲夜の言葉の意味がわかった。

亜弥加が咲音と一緒に行けば亜弥加は必ず言い返し、さらに面倒なことになる…

と考えて行かせなかったが、既に面倒は起こっていた、と咲夜は気付いた。

5時間目も終わり、6時間目が始まって、咲音は教室に戻ってこなかった。

「咲夜ちゃん、咲音探しに行こうよ」

「…そうだな」

SHRを抜け出し、亜弥加と咲夜は咲音を探しに行った。

「どこに居ると思う？」

「……」

人の少ない所といえば…テラスだろう。

「こつちだ」

二人は階段を駆け上がった。

「咲音！！」

咲夜の予想通り、咲音はテラスに居た。こちらに背を向けて座り、一人風に吹かれていた。端ギリギリなので、かなり危ない。

亜弥加に呼ばれても、咲音は振り向かなかつた。
俯く彼女に、二人はゆっくり近付く。

「亜弥加っ！咲夜ちゃんも！どうしたの？」

「…へ？」

いきなり振り向いた咲音の表情は、とびきりの笑顔だった。

「な、泣いてるかと思ったのに…」

亜弥加は呆けながら呟く。

「ん？何で？」

「何で戻ってこなかったんだよ」

咲夜が言った。

「ああ…はは、ちょっと疲れちゃって…サボっちゃった」

咲音はクスツと笑うと、立ち上がった。

「クラスの子には話したの…？」

「…うん」

背を向けて歩き出す。

「やっぱり無理だったよ。でも、しょうがないよね…」

なおも笑いながら話す咲音。すると、ふいに立ち止まった。

「もう友達じゃないんだもん、ね…」

言葉の最後は、声が震えていた。

「ごめん…ごめんね、咲夜ちゃん」

咲音は、後ろを向いたまま謝った。

「！」

「私…私が泣いちゃったら、咲夜ちゃんが傷つくと思ったから…自分のせいで、私が傷ついてるって、思ってたほしくなかったから…」
しゃくりあげながら、言葉を紡ぐ。

「これ以上私が悲しまないようにって、離れて行ってほしくなかったから…」

「咲音…」

「何があっても、咲夜ちゃんの前で落ち込んだり、泣いたりしないって、思ってたのに…っ」

堪えようともがいても、止まらない涙。

咲夜は一步踏み出した。

「咲音」

咲音は涙を見せることはしまいと、振り返ることをしない。

「ごめん…本当に、ごめんな。私のせいで、こんな苦しい思いをさせて…」

咲夜の言葉に、ギュツと目を瞑る。

あなたのせいじゃないの…

「でも、もうお前から遠ざかることはしない」

「！…」

「一緒に、居てほしい。」

…私も、咲音に離れて行ってほしくないから…」

「咲夜…ちゃん…」

咲音は驚きと嬉しさの入り交じった表情で振り返った。

「だから、今は…」

思いつ切り、泣いていいんだ」

咲音が目を見開くと同時に、さらに涙が溢れ出した。

「……うっ……うっ……っ……」

咲音の嚙り泣く声が、テラスに響いた。

「咲夜ちゃんに全部持ってかれちゃったなあ、あたしが慰めるつもりだったのに」

咲音が大分落ち着きを取り戻した時、亜弥加が冗談めかしてそう言った。

「亜弥加：ありがとう」

亜弥加はふっと笑うと、咲音の正面に向き直った。

「咲音は一人じゃないよ。あたしも咲夜ちゃんもついでる。今はまだまだ弱いかもしれないけど、絶対に良い方向に向かってく。あんたが諦めさえしなきゃね」

「……」

「あたしは、他の誰が何と言おうと、咲音から離れたりしない。当たり前だよ。そのうち皆だって味方になってくれるから」

「……うん！」

咲音はにっこり笑うと、暗くなりかけている空を眺めた。

この先、もっと辛いこととか、悲しいこととか、色んなことが待ち受けていると思う……

でも、私達はきつと、諦めない。だから、乗り越えていける。
今はまだ、太陽はきつと私達を照らしてはくれない。
でも、いつか必ず近付ける時が来る。
月が見ていてくれるから…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1399z/>

月明かりの夜

2011年12月5日00時53分発行